

作文部門受賞作品

静岡県知事賞

だっこして!!

静岡サレジオ小学校

六年 高田 愛弓

トイ・プードルの「らら」は二才になったばかりだが、とても甘えん坊である。立って歩いている時は、足元にぺったりくっついてついて来るので、うっかりふんでしまいそうになるし、ぴよんぴよん二本足ではねて、すぐ「だっこ」をおねだりする。しゃがんで作業している時、私のお腹と足の間のわずかなすき間に、無理矢理顔を押し入れて来て、ひざに乗ろうとするし、ソファでくつろいでいると、私の体の上に「フセ」の形で乗っかって、少し上目づかいをする。玄関のチャイムが鳴れば、必ず自分も「だっこ」されて一緒に出て行きたいとアピールするし、お留守番などと分かると「だっこ」されたまま、あごをくっつけ、ものすごく大きなため息をついて、しばらく離れないのだ。とにかく、こんなに「だっこ好き」な犬はいないだろう。

そんな、とても甘えん坊ならだが、夜になって灯りが落ちると、静かにゲージで寝る所だけは、おりこう犬だった。

しかし、ある日、消灯してもおりの中を歩き回るライオンの様に落ちつかなく、ぴよんぴよ

んはね、クークー鳴き出してしまった。初めは、遊び足りなくて、甘え鳴きしているのだろう。と思い、家族中で知らんぷりしていたのだが、十分たっても十五分たっても、あきらめず鳴いていたので、母が仕方なくケージから出して、

「どうしたの？もうねんねだよ？」

と話しかけると、熱烈に「だっこ」アピール。すると、母は赤ちゃんに話しかけるように、背中をゆっくりさすりながら、優しくだっこして「ねんね、ねんね」とくり返し言った。少し落ちついておとなしくなったので、そのまま寝かそうとすると、またうろうろ、ぴよんぴよん。そのうち困ったように鳴いて、母のひざを上がったたり下がったりし始めた。

ららはお腹が痛かったのだ。しかし、「痛い」のが「怖く」て、母を呼び続け、不安で一杯だったから「だっこ」して欲しかったのだ。いつも、ただ甘えていたから「だっこ」して欲しいのではなく、不安だったり、怖かったり、痛い時も「だっこ」が必要なのだとその時初めて知った。

言葉を話せない動物は、どこが痛いかも、どうして欲しいかも分からない時がある。犬も必死で、自分の知る限りのアクションをして伝えようとし、私達も必死で原因を探ろうとする。普段良く観察して、どんな時にどんな行動に出るのか、予想して理解していく必要がある。今の「だっこ」が必要な事かどうかも含めて、「だっこ」のしすぎに注意しつつ、愛情を注ぐ時にはおしみなく注いで、これからも上手に愛犬とつき合っていけたら、私の事を「最高なパートナー」として、より信頼してくれるだろうと思う。

「だっこして!!」は信頼の証かもしれない。